

目次構成

目次

0. 序論 研究の背景と目的、方法 ならびに既往の研究

0-1 研究の背景

0-2 研究の目的

0-3 研究の方法と対象資料

0-4 既往研究

0-5 本論文の構成

1. 本論・第一章 本研究における建築家論の定義とその分析手法

1-1 本章の目的

1-2 吉阪隆正の建築家論の定義

1-3 吉阪隆正の建築家論の文脈とその四つの分類 (分析手法)

2. 本論・第二章 論考に見る吉阪隆正の建築家論の分析

2-1 本章の目的と構成

2-2 本章で扱う論考について

2-2-1 『吉阪隆正集』について

2-2-2 『建築家の人生と役割 吉阪隆正集 9』について

2-3 吉阪隆正の建築家論の論構成とその内容

2-3-1 吉阪隆正の建築家論の基本的な論構成とその内容 (建築家の任務、建築家の能力を中心として)

2-3- 2 必要なプロセス・訓練

2-4 小結

3. 本論・第三章 吉阪隆正が見たル・コルビュジエの建築家像の分析

3-1 はじめに

3-2 本章で扱う資料について (『ル・コルビュジエと私 吉阪隆正集 8』)

3-3 吉阪隆正が見たル・コルビュジエの建築家像の論構成とその内容

3-3-1 ル・コルビュジエの果たした任務

3-3-2 ル・コルビュジエの能力

3-3-3 ル・コルビュジエのプロセス・訓練

3-4 日記帳に見るル・コルビュジエへの批判

3-4-1 本研究における日記帳の役割

3-4-2 ル・コルビュジエへの批判の言及内容

3-4 小結

4. 本論・第四章 吉阪隆正の建築家論と吉阪隆正が見たル・コルビュジエの建築家像の関係

4-1 はじめに

4-2 建築家の任務とル・コルビュジエの果たした任務

4-3 建築家の能力とル・コルビュジエの能力

4-4 建築家のプロセス・訓練とル・コルビュジエのプロセス・訓練

4-5 小結

5. 本論・第五章 結論

6. 本論・第六章 考察

吉阪隆正の建築家論の展開とル・コルビュジエ

ーフランス留学期日記帳の解読を発端としてー

序論

0. 序論 研究の背景と目的、方法 ならびに既往の研究

0-1 研究の背景

吉阪隆正はフランス留学 (1950-1952) を終えて、ル・コルビュジエのもとを離れた後、多数の建築作品を残し、また都市計画や建築理論の分野でも戦後日本建築に大きな影響を及ぼした。しかし、未だその考えの全貌は捉えられていない。内藤廣が「思想なき思考」「日本建築学会編『建築論事典』彰国社、2008」と表現したその吉阪の思考への興味、そしてその活動の意図についての手がかりを得たいという思いから、吉阪の作家論としての本研究に至った。

0-2 研究の目的

吉阪は自身が考える理想の建築家像についての文章、いわば「建築家論」のようなものを多く残している。それは建築家という職能のあり方についての思索であると同時に、自らの生き方の内省として、またその後の活動の目標としても捉えることができる。本研究ではその「建築家論」を吉阪の活動の根本原理であると仮定して、その展開を解き明かすことを目的とする。

0-3 研究の方法と対象資料

【研究の方法】

本研究では、吉阪の建築家論を見る上で、吉阪は偉大な建築家として尊敬し続けたル・コルビュジエの建築家像をどのように捉えており、吉阪自身の理想の建築家像はどのようなものであったのか、その比較を通して分析する。

【対象資料】

・『建築家の人生と役割 吉阪隆正集 9』(第二章)

・『ル・コルビュジエと私 吉阪隆正集 9』(第三章)

・『パリ留学中 (1950-1952) の吉阪の日記帳』(第三章)

0-4 既往研究と本研究の位置付け

【既往研究】

本研究に先行する研究として倉方俊輔『吉阪隆正とル・コルビュジエ』(王国社、2005) が挙げられる。

本書では、ル・コルビュジエのもとを離れてからの吉阪の活動の原理を、その後の建築作品や建築理論を通して、ル・コルビュジエからの影響を中心として考察している。また一次資料として、フランス留学期の書簡を扱っている。

【本研究の位置付け】

・既往研究手紙としての意図がある書簡と比較して、日記帳を用いた点

・作品や建築理論からではなく、建築家論という視点から吉阪の活動の意図を探ろうとした点に本研究の新規性がある。

本論

1. 第一章 本研究における建築家論の定義とその分析手法

1-1 本章の目的と構成

本章の目的は本研究における建築家論の定義を明らかにし (第二節)、その分析手法を提案する (第三節) ことにある。

1-2 吉阪隆正の建築家論の定義

本研究において吉阪の建築家論を扱う目的は、吉阪の生涯の活動の意図を探ることにあるので、その目的に即した建築家論の定義を行うべきである。

従って、本研究では吉阪が理想の建築家像について語る言説に加え、吉阪自身の建築家としてのその後の活動への葛藤や悩みについての言説も分析資料として扱い、これを広い意味での建築家論として定義する。

1-3 吉阪隆正の建築家論の論構成とその三つの分類 (分析手法)

吉阪は『建築家の将来像』(日本建築学生シンポジウム総括、年代不明) の中で、建築家がある任務を果たすまでのプロセスについて、その実現のために必要な能力、そしてそのプロセス、あるいはその能力を養うために必要な訓練にまで遡って考えており、「その辺のところから解明しなければならない」としている。

本研究ではこの言説を手がかりとして、吉阪の建築家論の論構成を以下の三つに分類して分析を行う。

A 建築家の任務

B 建築家に必要な能力

C 建築家に必要なプロセス・訓練

そして第二章では、この分類に従ってそれらの内容について論じる。また、第三章では、吉阪がとらえたル・コルビュジエの建築家像として、この分類に対応させて、以下のように分類して分析を行う。

A' ル・コルビュジエの果たした任務

B' ル・コルビュジエの能力

C' ル・コルビュジエのプロセス・訓練

2. 本論・第二章 論考に見る吉阪隆正の建築家論の分析

2-1 本章の目的と構成

本章の目的は、吉阪の建築家論の基本的な展開を分析することにある。従って、まず本章で扱う論考について史料批判を行い (第二節)、その上で第一章で定義した分類に従って、それぞれの内容について分析を行う (第三節)。

2-2 本章で扱う論考について

本節では、吉阪隆正集は吉阪が雑誌などの様々な媒体で発表した

論考を第三者が再編集したものである。そして本章で扱う『建築家の人生と役割 吉阪隆正集 9』の編集意図は本研究の定義における建築家論とほとんど一致する。

2-3 吉阪隆正の建築家論の論構成とその内容

【A 建築家の任務】について

建築家の任務が「人々が皆豊かで幸福な生活ができるような新しい生活の秩序をつくる」という大きなものから、「人々の願望を形にまとめる」ことへと転換されていく過程が分析できた。

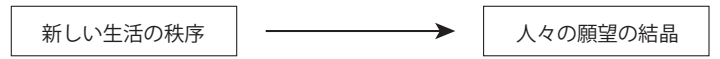


図 1. 建築家の任務

【B 建築家の能力について】

建築家に必要な能力として「新しい時代の生活像を予言する」能力と「個人的なものを社会的なものへと高める」能力が挙げられるが、前者のような予言に関する言及はなくなっていくことがわかった。

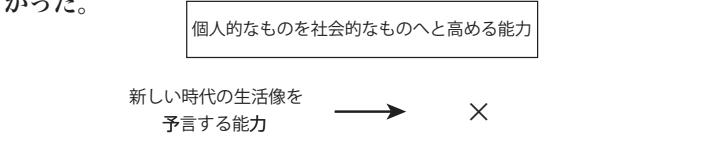


図 2. 建築家の能力

【C 建築家のプロセス・訓練について】

「個人的なもの」を育てるプロセスとして、「分析」と表現される「感激の経験の蓄積」と、「総合」と表現される「分類や法則の発見」の繰り返しがあることがわかった。そして、その提案の正しさの価値を高めるもの、つまり個人的なものを社会的なものへと高めるためのものとして有形学が存在があげられている。

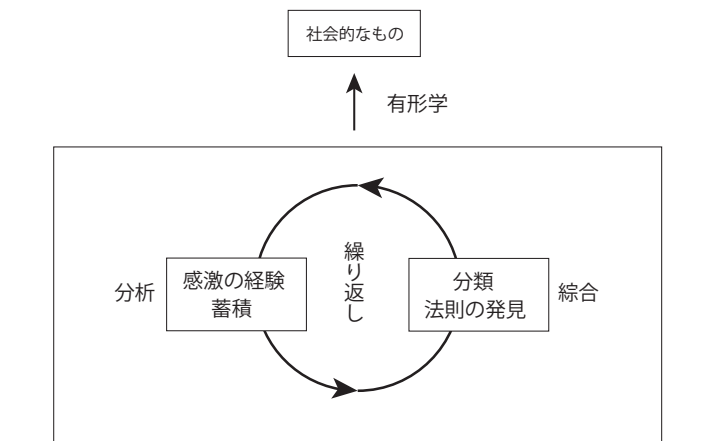


図 3. 建築家のプロセス・訓練

3. 第三章 吉阪隆正が見たル・コルビュジェの建築家像の分析

3-1 はじめに

吉阪がル・コルビュジェにその提案までのプロセス・訓練を特に学ぼうとしていたという点に、本研究において、吉阪がとらえたル・コルビュジェの建築家像を整理することの有効性が与えられる。

3-2 本章で扱う資料について

『ル・コルビュジェと私 吉阪隆正集 8』の編集意図と本研究の意図は一致していた。

3-3 吉阪隆正が見たル・コルビュジェの建築家像の論構成とその内容

3-3-1 ル・コルビュジェの果たした任務

吉阪はル・コルビュジェ設計のマルセイユのユニテについて「産業革命以来の混迷を抜け出す新しい機械文明の時代の秩序を示したもの」と述べている。

3-3-2 ル・コルビュジェの能力

吉阪はル・コルビュジェの天才たる所以として、「龍に目玉を入れる」という表現を用いて、その能力について説明している。そしてその「目玉を入れる」行為について、ル・コルビュジェ以外の多くの建築家について、「私たちでもそうした発見の感激は知っているが、生きて人に訴える所まで仕上げられずにいる場合が多い」としている。

また、吉阪はル・コルビュジェについて「ル・コルビュジェという予言者、私はあえて予言者と言おう、は今世紀の前半に現れて、形を持った詩で来るべき時代の予言を行なった。彼の多くの著書、多くの提案、そしてマルセイユやナントの建物、あるいは印度のチャンディガールの街は、それに他ならない」と説明し、ル・コルビュジェの予言者的な能力を指摘している。

3-3-3 ル・コルビュジェのプロセス・訓練

経験で得た感激をさらに分類して普遍化していく過程が述べられている。

3-4 日記帳に見るル・コルビュジェへの批判

3-4-1 本研究における日記帳の役割

本研究では、日記帳と著作の違いについて、日記帳にはル・コルビュジェへの批判的な意見があることに注目した。著作ではその内容について、出版社の意図も孕み、ル・コルビュジェへの強い批判は記されていない。日記帳にある批判は吉阪の建築家論のル・コルビュジェに対する独自性を示唆するものであり、その点に本研究における日記帳分析に有効性があると考えられる。

3-4-2 ル・コルビュジェへの批判の言及内容

日記帳にあるル・コルビュジェへの批判の言及から、吉阪はフランスでル・コルビュジェとその作品や理論にふれ、その予言的な抽象性に反発し、そこに実現の不可能さの要因があると感じていたことがわかった。またこの時点では、何かが足りないという疑問としてその感覚を残している。

4. 第四章 吉阪隆正の建築家論と吉阪隆正が見たル・コルビュジェの建築家像の関係

4-1 はじめに

本章では、第二章・第三章の分析結果を比較して、吉阪がル・コルビュジェの建築家像と離れて独自に展開させた建築家論を分析し、考察につなげる。

4-2 建築家の任務とル・コルビュジェの果たした任務

「産業革命以来の混迷を抜け出す新しい機械文明の時代の秩序を示したもの」とであると述べられているマルセイユのユニテは吉阪の建築家論における建築家の任務としての「人々が皆豊かで幸福な生活ができるような新しい生活の秩序をつくる」ことをある時代において達成したものだとと言える。

そしてその任務は、吉阪の建築家論においては「人々の願望を形にまとめる」ことへと転換されていった。

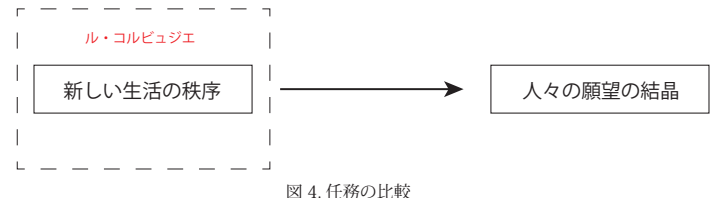


図4. 任務の比較

4-3 建築家の能力とル・コルビュジェの能力

吉阪のいう「個人的なものを社会的なものへと高める」能力はル・コルビュジェの「目玉を入れる」能力、つまり「感激を生きて人に訴える」能力と同様の意味だと分析できる。

また、「新しい時代の生活像を予言する」能力に関しては、吉阪がとらえたル・コルビュジェの建築家像に当てはまり、この考えは吉阪の建築家論からなくなっていくことは第二章で確認した。また日記帳ではル・コルビュジェのその予言的な部分を批判している。

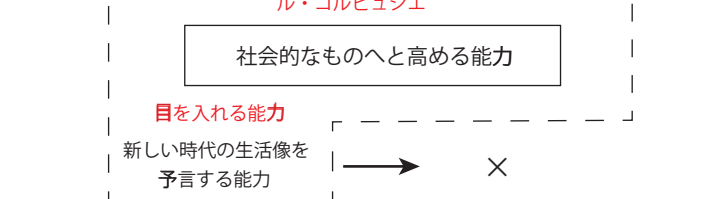


図5. 能力の比較

4-4 建築家のプロセス・訓練とル・コルビュジェのプロセス・訓練

この分類に関しては、吉阪の建築家論と吉阪がとらえたル・コルビュジェの建築家像と一致することがわかった。また、「個人的なものを社会的なものへと高める」ことを助ける存在としてあげられた有形学は「目玉を入れる」行為と対応していることが分析できる。

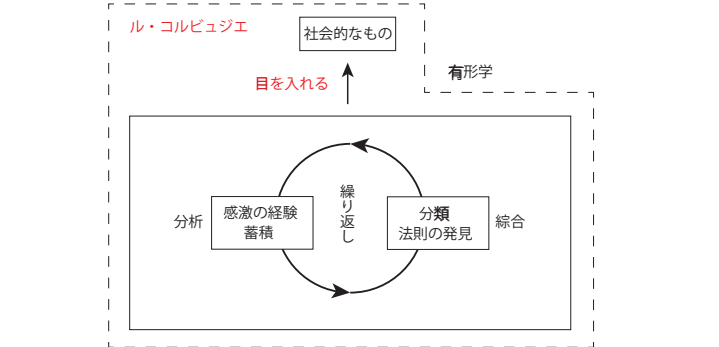


図6. プロセス・訓練の比較

5. 第五章 結論

以上のことから、吉阪の建築家論において「人々の願望を形にまとめる」ことへと変換されていったル・コルビュジェが達成した任務「新しい生活の秩序をつくる」ことの本質的意味は、「新しい時代の生活を予言する」能力に由来することを分析した。そしてその能力についての言及が吉阪の建築家論からなくなっていくところに、吉阪がル・コルビュジェのもとを離れてからの建築家論の展開の特徴がある。

吉阪の建築家論において、分析と総合によって高められていく「個人的な表現」、を社会的なものへと形にまとめる能力、つまり「目玉を入れる」能力を養うための訓練については明らかになっていない。そしてその能力を助けるものとして、有形学が存在をあげている。

6. 第六章 考察

【私、海が好きじゃない】

ル・コルビュジェを天才と称し、彼が形をつくるまでのプロセスを大いに学んだ吉阪であったが、吉阪の建築家論と吉阪がとらえたル・コルビュジェの建築家像の間には任務の対象のニュアンスに違いがあることを分析した。これを本研究では「予言」と「把握」の能力の違いに由来するものと考察する。新しい時代の生活像を予言し、その秩序を世界に示す行為のもととなる能力を「予言」とし、人々の願望の結晶を形に表現する行為のもととなる能力を「把握」とする。この違いにこそ、吉阪がその魅力に惚れたル・コルビュジェに対しても絶対にゆずれなかった思想があると考えられる。

吉阪は『『モデュロール』II 訳者の言葉』で、そのあまりの素晴らしさに、「疑問符をつけたくなる」と述べ、その要因をこう分析している。

あるいは私だけの問題で、読者諸氏はまた別な感じ方をされるかもしれないが、その疑問の根底には、彼、ル・コルビュジェが、山よりは海が好きだといっていることがあるらしい。私は海よりは山が好きだ。海の好きな人と、山の好きな人と、どう違うのか、それはまだ宿題として、とにかく違うのであるらしいし、またこれは好き嫌いであるからどうにもならない。『モデュロール』II、1976年、鹿島出版会

またル・コルビュジェと同じく海が好きなクセナキスについて、

倦くまでも計算して海に乗り出す彼と、山の変わり易い天候の中で己を順応させていく私との対照的なものも見出すのだった。「ヤニス・クセナキス『季刊トランソニック』1975年」

と述べている。まさに、この「海」と「山」を「予言」と「把握」で言い換えることができるだろう。

日記帳にも、ル・コルビュジェの予言的な抽象性への批判が綴られていた。吉阪の根底には、論理的に突き詰めた予言的で抽象的な世界への反発があったのではないかと考える。やはり吉阪は「山」の人間であった。しかし、フランスへの留学でル・コルビュジェの圧倒的な魅力に惚れ、その造形力に加えて、自分とは相容れない部分まで吸収してしまった。吉阪の建築家論はいわばそのル・コルビュジェの「あく」が抜けていくと同時に展開していったのではないかと考える。そして、予言をするということは思想を世に示すことである。内藤廣が吉阪について「思想なき思考」「固定した思想を持たないという思想」と表現した意味がわかったような気がする。今後、吉阪の有形学や不連続統一の理論、また多くの作品についての研究が発展し、普及することを願って本研究の考察を終える。

参考文献・図版出典

【既往研究】

- 倉方俊輔『吉阪隆正とル・コルビュジェ』
- 倉方俊輔/山名善之『吉阪隆正の住居・都市理念に関する研究』
- 倉方俊輔『吉阪隆正の滞仏期の思考 -一九五〇～五二年の書簡分析』
- 井波吉太郎『吉阪隆正による著作・文献についての考察』
- 本橋仁/魔瀬翔太郎/中谷礼仁『吉阪隆正の日記帳に関する報告』

【参考文献】

- 吉阪隆正『吉阪隆正集第8巻 ル・コルビュジェと私』勁草書房、1984
- 吉阪隆正『吉阪隆正集第9巻 建築家の人生と役割』勁草書房、1985
- 吉阪隆正日記帳（1950-1952）

【図版出典】

- 図1～7. 筆者作成

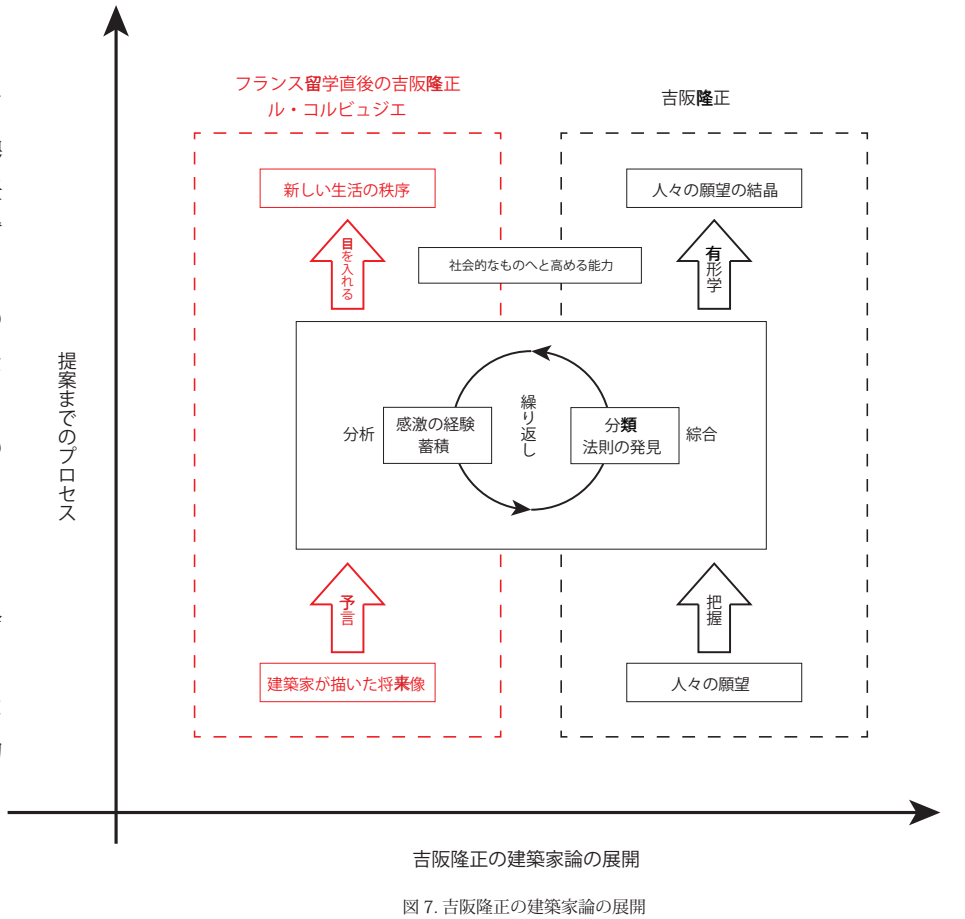


図7. 吉阪隆正の建築家論の展開